20 世紀前半の医学研究者の業績発表と，抄録・索引誌でのその収録状況－ある臨床医学者の事例－

小野寺夏生[1]，児玉閲[2]
[1]文部科学省科学技術・学術政策研究所，[2]東邦大学医学メディアセンター

20 世紀前半，すなわち明治末期から昭和 10 年代までの医学研究者の業績発表の実態，それらの業績の抄録･索引誌への収録状況を，内科医小野寺直助を一事例として調査した。

小野寺は 1904（明治 37）年に九州大学医学部の前身である京都帝国大学福岡医科大学の第 2 回生として入学し 1908（明治 41）年に卒業，第一内科教室に入局して 1913～1916（大正 2～5）年に独，墺，英に留学後，33 歳で第三内科教授となり，1942（昭和 17）年までその職にあった。この間の主要な業績として，アニオンの生理作用，胃曲線診断法，圧診法などがある。

九州大学（前身の京都帝国大学福岡医科大学を含む）在籍中に小野寺が著者として発表した論文（講義，講演，座談回答の記録もある）を，2 つの情報源[1,2]を用いて調査した。以下では，文献 1)を「論文集」，文献 2)を「医中誌」と呼ぶ。

論文集には，この期間の 73 編の論文（全文）が収められており，そのうち 11 編は外国誌に発表されたものである。一方，医中誌からはこの期間に 92 編が検索された。うち論文集に収められていないものが 47 編であったので，両者を合わせた論文数は 120 編になる。

表 1 に，120 論文の発表年代別内訳を，表 2 に国内論文のうち出典不明を除いた 107 編の発表資料内訳を示す。「福岡医科大学雑誌」，「九州医学会雑誌」，「九大医報」など九大や九州に関係のある雑誌への発表が多い(「実地医家と臨牀」の出版社も福岡市にある)。

医中誌に収録された 92 論文について単著と共著に分けたところ，単著 58 編，共著 34 編で共著率は 37%であった（講義録，講演，座談会等を除くと単著 44 編，共著 20 編で共著率 31%)。現在に比べると共著の割合は少ない。

外国誌に発表された 11 論文中，英国留学中の研究に関する 2 編（Biochemical Journal に発表）のみが PubMed と Web of Science に収録されていた。

表1 論文の発表年代別内訳

年代	主な活動状況	国内誌	外国誌	計
1907-12	学生、副手、助手	6		6
1913-17	欧州留学		5	5
1918-22	教授就任、伝染病研究	19		19
1923-27	アニオン、アルカロイド研究	12		12
1928-32	胃曲線研究	20	5	25
1933-37	圧診法研究	32		32
1938-42	九大最終期	19		19
不明		1	1	2
計		109	11	120

表2 論文発表資料の分布

発表資料	論文数
福岡医科大学雑誌	13
実地医家と臨牀	11
診断と治療	9
実験医報	8
臨牀の日本	8
日本内科学会雑誌	6
台湾医学会雑誌	5
東京医学会雑誌	5
九大医報	4
東京医事新誌	4
九州医学会会誌	3
診療と経験	3
消化器病学	3
その他(22誌)	25
計	107

謝辞

医中誌の調査について協力をいただいた松田真美氏（医学中央雑誌刊行会）に感謝致します。

参考文献

1) 九州帝国大学医学部第三内科学教室編纂．小野寺教授論文集．日本医書出版，1944.
2) 医学中央雑誌．医学中央雑誌刊行会．vol.5 (1907/1908)～vol.79 (1942).